

第 17 回 PIC 懇談会 第二部「南の島で暮らす、南太平洋から学ぶこと」(続き)【4/5】

ツバルの離島の子どもたち

小川：

さてさて、今回はせっかくの機会なので、事前に「もんでんさんに聞きたいこと」ということで皆さんからご質問をいただきました。時間の関係で全部というわけにはいかないのですが、いくつかこの場で伺ってみようと思います。まず最初のご質問です。

「ツバルの子どもたちと日本の子どもたちを見ていて、日本の子どもたちに今後どういう経験をさせていったほうがいいのか、また大人は子どもを、未来をどう考えながら過ごしていくのがいいのか、お考えをお聞かせください」

先ほどのスライドでも出てきましたが、もんでんさんはお子様をつれてツバル離島暮らしをなさっていらしたので、現地で生活する中でいろいろお考えになったことも多かったと思います。私もぜひそのあたりを伺いたいたいと思い、もんでんさんにスライドの準備をいただきました。もんでんさん、よろしくお願いします。

もんでん：

はい。ではスライドでお願いします。

**写真 20** これはバイツプという島での写真で、野鳥を獲っているところです。ナヌマンガでは網で獲るんですが、バイツプではもっと簡単にこのように空気銃を使います。で、森に大人が鳥を撃ちに行くとすると、子どもたちがわらわら一緒についてきて、こうやってじっと大人の仕事をしています。ツバルでの生活を通じて、私はこれがとても大事な文化だなと思ったんですけど、いつも大人が何か生活の仕事をするときに、子どもが見ていて、そして仕事を徐々に覚えていく、という社会がツバルにはあります。



写真 21



たとえば**写真 21**は 12 歳のオットマーという男の子が高いヤシの木に登ってココナッツをとっているところですが、男の子も 12 歳にもなると、木に登ってみんなが飲むココナッツを取る仕事は、当たり前のようにできるようになります。

**写真 22**は 13 歳のファトゥという男の子です。ツバルではみんな豚を飼っていて、ヤシの硬いところを切って毎朝エサをやります。この家では 13 歳のファトゥの仕事でした。豚のエサにするために、毎朝 10 個も 20 個もヤシを砕いて切っていくのは大変な力仕事なのですが、毎日とても手際よくやっ



写真 22



写真 23

ていました。まだ 13 歳ですが、豚のこともよく知っていました。

写真 23 は、ナヌマンガ島で一緒に暮らしていた家族のハイチアがパンダナスの葉っぱを取っているところです。このとき 9 歳でしょうか。パンダナスの葉っぱには鋭い棘がついていて、これもけっこうたいへんな仕事なのですが、ハイチアは、お母さんやおばちゃんと森に行き、大人が行けないところにもサルミみたいにピョップピョップと登って、葉っぱを取っていきます。9 歳の子がとても得意気な仕事をしていました。で、そんなハイチアを見て、「私も！」と頑張る木に登ってキエの葉取りをはじめた私の娘の夢さん、当時 11 歳ですが、それが

写真 24 です。

写真 25 はハイチアと夢さんと 12 歳のフィネマです。ツバルではお祭りに行くときには花冠をしますが、大人が忙しいときには、花冠を編むのは子どもの仕事になります。小さな時から子どもたちは大人が花冠を編むのを見ているので、12 歳にもなると、真ん中は赤でこっちは白、そっちが黄色という具合に、とてもきれいにおしゃれに上手に、花冠を編めるようになっていきます。

このようにナヌマンガ島では、朝から晩まで子どもが大人と関わっていて、そうした中でいろいろなことを学んでいくんですね。じつは私は日本の都市を転々と引っ越しながら育った典型的な都会っ子で、子どもの頃に関わった大人は両親と小学校の先生だけでした。ですんで、ツバルの生活ぶりを見て、私はすごくうらやましく思ったとともに、私の子ども時代の生活はなんて不自然だったのだろうと切実に感じました。

次の写真 26、これはフィネマとハイチアといっしょに豚を煮る海水を取りに海に行ったところです。フィネマは結構やんちゃで、しょっちゅう叱られていたのですが、でもこうやって自然の中で毎日仕事をしていると、どやされても叱られても、気持ちがずっと溶けていくんじゃないかと感じました。

小さな田舎社会ですし、私自身もしょうもない人間関係のいざこざとか、イヤなこと、ストレスを感じることは、ツバルでもやっぱり日本同様いろいろあります。



写真 24



写真 25



写真 26

でも、この自然、そして海からの潮風、ヤシの木の匂い、森の香りなどに包まれて暮らしていると、鬱屈したりすることは全然ありませんでした。ツバルの自然の中でふっと夕日を見たり一息ついたりすると、イヤなことが細胞のひとつひとつからすっと流れ出ていってくれるといいますか。

毎日、子どもたちと屋根に登って夜明けを見たり、豚を煮るための海水を取りに海に行ったり、そんなふう子どもたちと一緒に仕事をしている中で、自然の中で仕事をするというのは、人間の精神にとってとても大事なことなのだとつくづく感じました。

で、**写真 27**。ハイチアと夢さんですが、腹の底から笑っています。毎日必ず1回は、こんな風に大笑いすることがあって、それがすごいなと思います。私も笑いながら、日本で自分の子ども時代とかをふと思い浮かべて、涙が出てしまったこともありました。これが、子どもが生きるということなんだなあ、と。

最後です。次お願いします。子どもたちは朝からたくさん大人の仕事を手伝うのですが、夕方は子どもの時間、水浴びの時間になります。**写真 28**はナヌマンガのハーパイ湖という海水湖で、子どもたちが大好きなところです。ハイチアとうちの娘が飛び込んで行っていますね。本当にもう全身で遊んで楽しんでいました。



写真 27



写真 28

<第2部 Part 5に続く>